

## 英 語（リスニング）

### 第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

#### 1 前 文

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「英語」にリスニングが導入されてから、15年目となる。令和2年度センター試験におけるリスニングテストの受験者は、本試験が512,007人（昨年度は531,245人）で、受験者全体の約97.2%（昨年度は97.3%）に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料等が、センター試験の受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。

令和2年度センター試験「英語（リスニング）」について主に検討・評価した項目は、範囲・形式・難易度・分量・内容・表現についてである。また、評価の視点として、以下の五つの事項を主なよりどころとした。

- (1) 高等学校学習指導要領「外国語」（以下「指導要領」という。）
- (2) 令和2年度大学入試センター試験出題教科・科目の出題方法等  
『英語』は、「コミュニケーション英語Ⅰ」に加えて「コミュニケーション英語Ⅱ」及び「英語表現Ⅰ」を出題範囲とする。
- (3) 「コミュニケーション英語Ⅰ」「コミュニケーション英語Ⅱ」「英語表現Ⅰ」の教科用図書
- (4) 平成31年度大学入試センター試験「英語（リスニング）」（本試験）
- (5) 平成31年度大学入試センター試験 試験問題評価委員会報告書（本試験）

#### 2 範囲・形式・難易度・分量

##### (1) 範囲

指導要領及び教科用図書に基づいており、高等学校段階における「聞く」の領域を中心とした学習の成果を問うものとして、おおむね適切であった。

##### (2) 設問形式・設問数・配点・難易度

大 問	設問形式	設問数	配 点		難易度
第1問	対話（短）：イラスト、グラフ、数値等選択	6問	各2点	計12点	やや難
第2問	対話（短）：応答選択	7問	各2点	計14点	やや難
第3問	A 対話（中）：内容把握	3問	各2点	計6点	標準
	B 対話（長）：内容把握	3問	各2点	計6点	標準
第4問	A モノローグ（長）：内容把握	3問	各2点	計6点	標準
	B 3人の会話（長）：内容把握	3問	各2点	計6点	やや易
全 体	平均点：28.78点（昨年度31.42点）	計25問	50点満点		標準

昨年度と比較すると、平均点は2.64点、得点率は昨年度の62.84%に対し、57.56%と、5.28ポイント下降した。問題形式がほぼ類似している過去4年間で比較すると、ここ数年の下降傾向に歯止めがかかった昨年度に比べ、やや平均点は下がったが、6割程度を維持しており、標準的な問題であったと言える。

(3) 分量

① スクリプト (( ) 内は平成31年度試験のもの)

大 問	設問ごとのスクリプト語数						平均語数	最大語数差
第1問	No. 1	26 (30)	No. 2	30 (30)	No. 3	29 (27)	28.3語	4語
	No. 4	30 (30)	No. 5	28 (30)	No. 6	27 (28)	(29.2語)	(3語)
第2問	No. 7	24 (29)	No. 8	31 (30)	No. 9	28 (30)	26.7語 (28.9語)	7語 (2語)
	No. 10	27 (28)	No. 11	25 (28)	No. 12	25 (28)		
	No. 13	27 (29)						
第3問A	No. 14	47 (50)	No. 15	50 (48)	No. 16	49 (48)	48.7語 (48.7語)	3語 (2語)
第3問B	No. 17 - 19		144 (144)					
第4問A	No. 20 - 22		198 (203)					
第4問B	No. 23 - 25		297 (294)					

スクリプトの語数については、全体的には例年並みで、各設問の趣旨・目的に即したおおむね適切な分量であった。

② 質問文と選択肢

センター試験のリスニングでは、第2問を除き、質問文が問題用紙に印刷されている。そのため、選択肢の語数と合わせ、その分量はリスニングテストとしての妥当性を考える上で一つの視点になる。10語以上の質問文は例年並みの4問で、選択肢の語数もほぼ例年並みの分量であった。

③ 第3問Bの視覚情報

視覚情報に含まれる語数は、昨年度の61語に対し、今年度は52語と減少した。また、昨年度は博物館の四つの展示案内のうち、二つには追加料金に関する情報が含まれ、残りの二つにはレクチャーの開催曜日及び時間に関する情報が含まれるなど、提示されている情報の種類が異なるという点で読み解く際にやや注意を必要としたが、今年度は4種類のアルバイトについて説明するポスターの中に含まれる情報が、「勤務曜日および時間」「応募する際の条件」の二つに整理されており、何が書かれているかを把握しやすかったと思われる。四つの絵に共通して使われている“required”も、受験者にとっては特段難しい単語ではなく、視覚情報の処理にかかる負担は軽減したと思われる。

### 3 内容・表現・程度

(1) 総括的分析

① スクリプト

例年同様、日常の様々な場面を想定した会話が盛り込まれており、「多様な場面における言語活動を経験」させることを促す指導要領の趣旨に沿ったものと言える。「昼食へ誘う」「本の感想を聞く」「テストの結果について話す」などの場面を扱った問題では、“Do you~?”で始まる質問文に対し、Yes/Noで答えないなど、実際の会話を再現したauthenticな表現が見られ、より現実に即した会話の場面の中で文脈を理解する力、話者の意図を類推する力が試された。また、検定教科書ではあまり見かけない“kind of~”の使われ方や“a bit more”、“be hard on yourself”など日常会話ではよく使われる表現が多用されており、これらの表現を知識として知っているだけでなく、聞いたり話したりできる使用レベルにまで高めておくことが求められている。第3問Aのコンピューター室の場所を聞く問題では、聞いた内容を頭の中で

絵として思い浮かべた上で思考することが求められ、第4問Bの3人の会話を聞いて答える問題は、理解を妨げたり受験者が混乱するような発言がなく、処理すべき情報量が適度であり、いずれも良問であった。一方で、聞き取った数値の情報を瞬時に取捨選択した上で計算する必要がある問題や、単語そのものは知っていても、コンテキストにふさわしい意味を音声情報のみで理解する力が必要とされる問題などは、受験者にとって難易度が高かったと思われる。

② 質問文と選択肢（図表中の表現を含む。）

例年同様、複数の情報を結び付けて判断し、処理する力を求められる問題が多かった。問題によっては、受験者が正答として予想するであろう表現が選択肢の中に含まれておらず、場面・文脈を的確に把握した上で話の流れを類推する力がなければ正答にたどり着けなかったり、正答が抽象度の高い表現に言い換えられていたため、限られた時間で意味を正確に把握できなかったと思われるものもあった。

③ 音声

数値等を含む会話では、実際のコミュニケーションの場面でも確認のために聞き返すことがあることを考えると、現行の2回再生は自然である。会話の場面に応じて声の調子を変えるなど、情報が伝わりやすい工夫がなされていて、受験者にとっては場面が想像しやすい音声となっていた。全体的な速度は昨年度に比べややゆっくりであったが、場面や会話の目的に照らし合わせるとおおむね適切であった。来年度から実施される大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）では、問題の中には1回再生になるものもあるが、今年度同様、受験者にとって過度な負担とならないよう配慮が求められる。

④ まとめ

文法・語彙・表現・発話速度などの観点から、受験者の日頃のコミュニケーション活動における学習成果を測るものとしておおむね適切であった。検定教科書に比べると場面設定が実際の会話に近く、日頃から使用場面を想定した言語活動をどれだけ行っているかが問われており、authenticで多様な表現に触れさせるとともに、四技能全てでそれらを使えるように指導していくことが求められている。また、実際のコミュニケーション同様、センター試験においても、聞き取ったり読み取った情報を整理して正確に判断する力が求められており、教育現場においても引き続き実践的な思考力や情報処理能力を養うことが必要である。

(2) 個別的分析

第1問 昨年度同様、イラスト・グラフ・数字の聞き取りなどを含む問題である。問4では、“remark”の文脈に応じた意味を正確に理解するのが難しく、かつ“Would you mind~?”の返答として否定語“not”を含む返答が承諾であることを瞬時に理解し、選択肢の中で適切な言い換え表現を選ぶことが求められた。また、問5では質問文に照らし合わせて情報の取捨選択をした上で計算する必要がある、いずれも難易度が高かったと思われる。

第2問 昨年度同様、A-B-A形式の短い対話を聞いて、発話の意図や状況を把握した上で次の発言を予測する問題で、文脈に応じて類推する力が試された。問9では、お礼の返答として受験者にとってはなじみのない選択肢が示されており、答えを類推するのは困難であった。問12では、“Do you think~?”の問いかけに対して立場を明らかにしない返答が正答であった。このやりとりは、実際の会話でしばしば見られるが、受験者にとってはなじみが薄かったため、難易度が高かったと思われる。また問13では、“I can't help ~”の表現が見慣れた動名詞を伴っていなかったため、意味を把握できなかった受験者が多かったと思われる。

第3問 **A** 昨年度同様、日常的な話題について二人による6~7回程度のやりとりを聞く問題である。いずれも場面や話題が実際の生活の中で起こりそうなものが取り上げられていた。問

14では、“charged me”の理解度で、問16では、女性が置かれた状況を正確にイメージできたかどうかで正答率に差が出たと思われる。いずれもやや高度な知識や複雑な情報処理を必要とし、受験者の聴解力を問う良問であった。

第3問 **B** 今年度の視覚情報の読み取りは、四つのアルバイトに関するもので、それぞれに含まれる情報の種類が統一されており、昨年度よりも読み取りは容易であった。対話の展開も自然で、視覚情報と聴覚情報を整理しながら解答できる標準的な問題であった。問17では、与えられた具体的な情報に対し、選択肢では正答が抽象度の高い表現に言い換えられており、受験者にとっては難易度が高く感じられたと思われる。問18では、“imply”を含む質問文が何を問うているかが理解しづらく、難易度を上げた要因と考えられる。さらに問19では、限られた時間の中で複数の情報を組み合わせて処理し、解答を導き出さなければならず、正答率に差が出たと思われるが、思考力と聴解力を測る良問であった。

第4問 **A** 昨年度同様、200語程度のモノログを聞いて答える問題で、筆者の体験を基に、日本とネパールの文化を比較する内容であった。内容や語彙自体は平易であったが、第4問Aの1問目である問20を解く手がかりがモノログの中盤以降に配置されており、受験者が戸惑う一因となったと思われる。さらに、問21の内容がその直後に述べられているため、聞き逃してしまった受験者も多かったと推測される。

第4問 **B** 3人の会話を聞いて答える問題で、1分間での読み上げ速度は昨年度（160wpm程度）と比べると、137wpm程度とかなり遅く、語末まではっきりと聞き取れる明瞭な発音で、聞きやすかったと思われる。内容はDavidがギター教室を続けるべきかやめるべきかについて3人が意見を交わすというもので、場面が想像しやすかった。問23は、“but even more than that”を確実に聞き取ってDavidがギター教室をやめようと考えている最大の理由を選択する問題であったが、この箇所をはっきり話しているため、選択肢のどれが最大の理由であったか比較的容易に解答できたと思われる。問24は、“Your teacher knows what you need to do to make progress.”を端的に表した内容を選択する問題で、受験者に思考力を求める良問であった。全体的に、会話内で使われている単語は平易で自然な言い回しのものが多く、会話の流れが自然であるため、特に判断に迷う材料はなく、受験者にとっては取り組みやすい問題であったと思われる。

#### 4 意見・要望・提案等

- (1) 今回の試験は、いずれの問題も適切な語数であったと考えられるが、来年度の共通テストでは、1回読みの問題が含まれるため、問題量の増加が予想される。試験時間を考慮した上で受験者にとって極端な負担増とならないように配慮していただきたい。
- (2) 第1問では、受験者にはややなじみのない場面設定が見られた。時間の制約がある中で状況を判断し、解答を選ばなければならないので、受験者が直接経験することはなくても、書物や報道、他教科の学習の中で疑似的な体験をしており、状況を想像できる対話という点に配慮していただきたい。第2問については、やりとりの中での自然な応答を選ぶ能力が問われるので、作為的な選択肢が正答とならないように引き続き配慮をお願いしたい。また、authenticな会話を身に付ける必要があるものの、未習の表現に対し、短時間で正確に推量し、解答を導くのは受験者にとってやや負担が大きいと思われる。推量することに加えて、複雑な情報処理を必要とするような問題にならないよう配慮していただきたい。第3問、第4問については、聞き取った情報を基に状況をイメージしたり、言い換えを駆使して内容を再構築したりすることを求める設問が多く、単に英語を聞き取るだけでなく、聞き取った情報を内在化して理解する必要があるため、

複雑な内容や過大な情報量とならないよう、文の構造・語彙・パラグラフ構成に配慮しつつ、設問が主要な内容に関するものであり、かつ前半・後半のどちらかに設問の答えが集中しないようにしていただきたい。

- (3) 今後とも、日常使われる自然な表現や、受験者が近い将来経験するであろうコミュニケーションの場面を取り入れていただきたい。なお、来年度の共通テストから導入予定の1回聞きの問題については、実際の会話場面においても1回しか聞けないような情報について聞き取る力を測る問題を検討していただきたい。その場合においても、会話中の言い換え表現や視覚情報が理解の助けになるよう配慮していただきたい。
- (4) 今年度の発話速度や明瞭さは受験者にとって取り組みやすいものであったと思われるが、実際の英語の運用場面での発話速度は、トピックの内容や状況、相手との関係性、話者の個人的な特性など、様々な要素によって変化するものであるため、大学入試においてもそれぞれの状況にふさわしい速度であることも必要だと考える。一方で、入試という性質上、リスニングテストにおける適切な発話速度をどこに設定するかは非常に難しい問題である。来年度、1回再生の問題が含まれる中で、場面設定や処理すべき情報の量と種類、質問文と選択肢の難易度など、様々な要素を総合的に勘案して、受験者の聴解力と聞き取った情報の処理能力を適切に測れる出題となるよう配慮していただきたい。

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 全国英語教育研究団体連合会

(代表者 鈴木 真人 会員数 約60,000人)

TEL 03-3267-8583

#### 1 前 文

今年で最後となる令和2年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）では、昨年の受験者数の531,245人から微減し、全国で512,007人の受験者がこの方式の試験に取り組んだ。高等学校学習指導要領（英語）では「実践的コミュニケーション能力の育成」に重点が置かれ、中等英語教育の現場では四技能と呼ばれる、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」を総合的に採り入れた授業形態が一般に進みつつある。また、現行の高等学校学習指導要領下では「英語で授業を進める」ことが明文化され、今までより一層「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が重視される教育課程や授業が期待されている。この実践的な英語教育を推進する大きな流れの中で、センター試験へのリスニング・テスト導入が実現して、15年が経過した。想定される様々な困難を乗り越えて、この試験が実施されたことは、我が国の英語教育にとって画期的なことであり、日本人全体の英語力がこれによって向上することを期待させるほど有意義な試験である。

徐々に状況は改善されているものの、残念なことにリスニング・テストについては、毎年のように、ICプレーヤーの不具合などのトラブルが起きている。報道等によると、ICプレーヤーの不具合などを訴えた91試験場の129人が、中断した設問から試験を再開する「再開テスト」の対象となった。また、試験中に受験者の目覚まし時計が鳴動するというトラブルがあり、「音の大きさが生活騒音の範囲を超えていた」として再開テストの実施を決めたケースもあったようである。後者のようなケースは、受験者の一層の自覚の強さが求められるが、機器関係のトラブルについては、今後一層改善の努力が必要である。というのも受験者に対して大学の合否、ひいては進路がこれによって左右されるという大切な試験である以上、受験者に大きな動揺を与えるからである。機械の故障は、余計な負荷を負わせ、当事者に不公平感を抱かせてしまう。ICプレーヤーに関するハード面での更なる改善をしていただき、トラブルの数がゼロになることを強く願っている。

本稿では、以下に今年度実施されたリスニング・テスト問題に関する意見と評価を記すこととする。平均点は一昨年度が22.67点で昨年度は31.42点、本年度は28.78点（昨年度比▼2.64点）、100点換算では57.56点であった。平均点としては、4年前から難化傾向が続いていたが、昨年度は一転して平均点が上がり、今年度は再び6割を切るというやや難化傾向となった。

読み上げられた英語の総語数は1,142語（昨年度は1,165語）で、設問と選択肢の総語数は597語（昨年は645語）であった。読み上げられた英語の語数はほぼ同じで、設問と選択肢の総語数がやや減った印象がある。語彙をいたずらに難しくしたり、英文の内容を複雑にしたりしているわけではなく、現場で教える立場からすると、普段からより実践的なトレーニングを積んでいる生徒は落ちついて実力を発揮できる問題が多かったと思われる。設問と選択肢の英文はあまり長くないことが望ましいが、かといってそれに拘泥するあまり不自然な文章になることは避けるべきである。

今年度は、リスニング問題の平均点は6割には届かず、言わば骨太な内容であったと言える。これについては、我々が従前より求めていたことが反映されていたものであった。骨太な内容という

のは、放送される英文がもう少しナチュラル・スピードを感じさせるものであったり、語彙についてももう少し幅広い内容のものであったりということである。というのも、試験問題等では高い聴解力を見せる生徒であっても、実際のコミュニケーションの場面においては、リスニングに苦勞をするという現状がある。リスニング問題は得点できるが、実際のコミュニケーション活動ではなかなか聴くことができない、というのはある意味で深刻な問題である。したがって、この分析においても、「多少難しくなっても、目指すべきレベルをある程度明示するものであってもよい」という提言を示してきた。

そういった意味では、今年度の難易度は今後の受験者が目指すレベルを明確に示せたということができる。会話の設定がやや親しみのあるものであったり、語彙もおおむね平易なものであったり、良質な内容であったと考えている。コミュニケーションに根差したやりとりを問うものが増え、より実践的な内容となっている。これは、今後の指導現場でより実践的なコミュニケーション活動の必要性を促し、またディスカッションやディベートなどの相互的で集団的な言語活動を促す一助となることも考えられ、歓迎すべき傾向である。

## 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問は短い会話を聞いて質問に合う答えを選択肢（イラスト・表を用いたものが2問）から選ぶ問題。会話は2往復（A－B－A－B）、内容も日常会話が多い。難易度から言えば、標準的な問題と言えよう。今後どのような問題傾向となるにせよ、あまりに細かすぎる内容を求める難問や奇問を避けて、易しい問題から少し難しい問題へと段階的に出題することを希望する。

内容については、日常生活に根差した、身近な内容となっており、受験者にとってもイメージしやすい場面となっている。そういった意味でも取り組みやすいレベルとなっている。今年はメディアでもとても話題となった「パンダの寝そべっている位置」というテーマが問1にあった。この問題のイラストが可愛くて印象的だったことから、報道でも大きく取り上げられ賛否が語られたが、「親しみ」を感じるという意味では良かったと考えている。聴解力もコミュニケーションの中で活かされることが前提であるから、当該問題のように親しみやすさや興味を湧かせる内容を含むものは好ましいと考える。問2で「女性が選んだフライト」について問う問題、問3に「パンフレット完成に必要なもの」について問う問題、問4に「明日のパーティーで女性は何をするか」について問う問題、問5には、「男性が所有しているDVDの数」について問う問題、問6では「サーモンの漁獲量の変化」について問う問題などが出題された。指導する立場としては、今後も今年度同様、最初の設問は「耳慣らし」として負荷のかからないイラストの問いなどを設定し、徐々に複雑な問いへと出題されることを希望したい。また、問2のような、将来的に受験者が実際に遭遇するような日常的な場面におけるやりとりが扱われている点などは、作問者の創意工夫が感じられ、非常に良問であったと考える。問6のように表の読み取りを求めるといった方向性は今後も続けてもらいたい。

第2問は対話の最後の発言に対する応答文を選び、対話を完成させる問題。数年前から、全ての問いがA－B－Aで終わり次のBを答えるタイプに統一され、受験者が問題形式に慣れたこともあり、一部の問題を除いてそれほど難しいと感じなかったように思われる。基礎的な運用能力を試す重要な問題であり、今後もこの種類の問題数が出題されることを期待したい。問7では、「マフィンの美味しさの秘密」、問8では「クリニックの予約時間」、問9では「相手から感謝を言われた際の応答」、問10では「レストランに置き忘れたかもしれない財布」、問11は「女性の通学の方法」、問12では「ある小説に読む価値があるかについての質問」、問13については「満点に届かなかったテスト結果」が会話のトピックとして出題された。いずれも実生活を意識した内容であり、口語表

現を含む自然な会話であったが、ただし、今年度については難易度が高いと思われる問題も含まれていた。問7などは、会話の流れをしっかりとつかんでいないと偽肢に惑わされかねない。また問10も同様で、会話の流れから店員の対応を確実に予測することが求められている。英語を聞き取ることができて、その会話の中でのコンテキストを把握し、その後の展開を類推する力は重要である。こういった問題は、日々の授業においても、言語活動への取組を促進させるもので、大変好ましい。ただし、今年度の問題でやや懸念を感じたのは、問9や問11、そして問13のような、やや「イデオマティックな表現」を解答とする問題である。特に問13は、helpの他動詞の用法を問う問題になるが、このhelpの用法は『ロングマン現代英英辞典』でも“it can't be helped”というフレーズとしてエントリーされているものであり、かつ“spoken”という説明が付いている。確かに重要な表現ではあるけれども、せっかく会話の内容が理解できて、解答の部分で「知識」を問われるような性質の問題が増えてしまうと、「知識」を吸収するの必要性を感じさせてしまい、受験者に偏った学習へと導くことにもつながりかねない。基本的な表現の知識は当然必要であるが、コンテキストは聞き取れても知識としてたくさんの表現を覚えないと対応できないような問題は、極力避けられることが望ましい。

第3問については、読み上げられた会話の数は、Aが6～7（去年は全て5～8）で、Bは13（去年は14）であり、会話の語数は、Aは146語（去年146語）、Bは144語（去年144語）と、AとBともに昨年度と同程度であった。

Aは昨年と同じ形式で、対話を聞いてその内容（場面・状況など）を推測して質問に答える問題が3題であった。一方Bは、年度も全ての設問で、文字情報と音声情報を組み合わせなければならなかった。図の細かい部分に注意させる問いもあり、良問であった。

Aについては、対話の行われている場面や状況の推測、対話をしている人物の発言の意図や人物の今後の行動を予測する問題。実際のコミュニケーションをしていく上で必要な状況判断力や推測する力を測り、各問題は、全ての内容を十分に把握した上で、最後の台詞を聞き逃すことができない問題であった。言葉の選択や話題の方向性も非常に同時代性が高く、作問としてはとても好ましいものである。特に問16は最後の女性の発言、“Great! And then just one floor up?”という発言までしっかり聞くことによって正解にたどり着く。語数や長さには制限がある中で、こういった良問を作り出すのは大変だと思われるが、注意深くやりとりを聞く、という態度を養成するためにも今後もこういった出題が望まれる。

Bも前述のように文字情報と音声情報をしっかりと組み合わせる考えなければ解けない問題であった。受験者にとっては厳しい部分もあるかもしれないが、より高い聴解力の養成を目指してもらうためにも、この傾向は好ましいものと言える。各問題を考える上で、四つの表からの情報と読み上げられた英文から複数の情報を正確につかむ必要がある。例えば問19は、読み上げられた英文において、男性が「平日の午後にサッカーの練習があること」、さらに「土曜日の午後にも練習があること」からBicycle Messengerが該当することを理解し、さらに図において「平日の午後には業務がない」という情報を得て、最終的に選択肢において「月曜から金曜まで働く」という正解を導くことになる。複合的な処理を求めるものであり良問である。また、例年以上に、読み上げられた英文と文字情報を関連付けて考えさせる問題となっており、作問者の方々の工夫に敬意を表するものである。作問に苦勞が多いかもしれないが、こういった緻密な作問を今後も期待する。

第4問Aは昨年と同様に、長めの英文を聞いてそれに関する三つの質問に答える形式で変化はなかった。去年は「2人の兄と自転車に乗る練習をする少女の体験談」であったが、今年は「お茶と時間に見る日本とネパールの文化の違い」であった。このように内容にバリエーションがあることは良いことである。設問にも工夫が加えられて新鮮な印象がある。文化論的な内容であり、誰もが



想起できる場面となっている。設問についても、英文がしっかり聞き取れていれば素直に解答できる問題であった。どこか一部分に偏ることなく、全体を正確に聞きとれているかがバランス良く出題されていた。文法、内容とも平易であり良問であった。

Bでは一昨年より出題されている「3人の討論を聞き取る問題」の形式であった。今後もこういった複数の話者によるやりとりの形式は継続してもらいたい。昨年度は「保護施設の犬をペットとして飼うかどうか」についてのやりとりであったが、今年度は「Davidが通っているギター教室をやめるべきかどうか」という話題であった。普段の学校生活でも起こり得る場面であり、テーマとしても一般的で適切であった。Aと同様、正解は音声情報から必ずしも直接的に得られるのではなく、言い換えたものや類推できるものが正解となるものがあり、これについても好ましい問題傾向である。また今年度は発言者の「主張」を明確に把握させる問題であった。問23では、Davidがギター教室をやめたい理由、そして問24ではそれに対するAmyの見解。そして問25では、最終的にMarkの見解を理解できることで正解を導くことができる。こういった複数人でのやりとりにおいて、それぞれの発言者の主張を明確に整理し把握する力を問う問題は重要であり、聴解力を問う問題として適切な作問の方向性と言える。例年、この分析で申し述べているとおり、「高い聴解力を持った受験者が確実に得点できること」が最重要であるので、適切なテーマで、上記のような素直な設問が望ましいと考える。

### 3 ま と め

センター試験においてリスニング・テストが導入され、実施されていることは極めて有意義なことであり、英語の授業では、今後も「実践的コミュニケーション能力の育成」に力が注がれることであろう。実際の教育現場でも、リスニングに関する諸活動が少しずつ活性化されているのも、センター試験でのリスニング問題の存在は大きい。歴史的にもこのような方式でリスニング問題を課すセンター試験の果たした影響は計り知れないものである。ICプレーヤーの改善については不具合ゼロが前提ではあるが、年々改善されている点については、関係者の努力と創意工夫の賜物であると考える。

年々問題が良化されており、コミュニケーションをベースとした問題作りや、出題レベルの健全な設定など、例年この場で要望としてお示ししている部分についても真摯に取り組んでいただけているという印象があり、作問者の方々の御苦勞に心から敬意を表したい。多面的な出題形式は、今まさに求められている「幅広い聴解力」を問うもので、前向きな傾向変化である。一部には難化したとの声もあるが、前提として、必要な聴解力を問うているものであるため、あまり過度に反応する必要はないと考える。このセンター試験のリスニングが、グローバル化されつつある世界で必要とされる躍動的な言語運用力を受験者が養成しようとするモチベーションとなり、また、教育現場で積極的な言語活動を促すような特性を持つものであることが望ましい。来年度から実施される大学入学共通テストでは、「英語（リーディング）」と配点が同一となり、「英語（リスニング）」はこれまでとは異なった存在となる。今後の一層の内容の充実を期待している。

## 第3 問題作成部会の見解

### 1 問題作成の方針

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の外国語「英語（リスニング）」は、高等学校の基礎的学習の達成度を判定することを基本方針として、高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）に準拠し、コミュニケーションを重視する英語教育の成果を問うものとなっている。具体的には、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る」という外国語教育の目的に準拠している。出題に当たっては、指導要領の中の、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」という点に特に配慮した。

第1問～第4問までの問題内容は、次のとおりである。

#### (1) 第1問

比較的平易な英語（語数約30）を聞いて、述べられている情報を正しく的確に把握することができるか否かを見る（イラストやグラフを使用する問い、計算を伴う問いも含む）。

#### (2) 第2問

比較的平易な対話（語数約30）を聞いて、場面・目的・言語の機能などを理解し、必要な情報を得て、相手の最後の発話に続く適切な受け答えを判断する力を測る。

#### (3) 第3問

##### ① 第3問A

対話（語数約50）を聞いて、情報・場面・話し手の意向などを的確に把握できるか否かの判断力を測る。

##### ② 第3問B

対話（語数約140）を聞いて、視覚的情報（ちらし、ポスター、一覧表など）も交えながら、発話者達の様々な見解や発話の意図を理解できるかどうかを見る。

#### (4) 第4問

##### ① 第4問A

まとまりのあるモノログ（語数約200）を聞いて、要点や概要を把握できるか否かを測る。

##### ② 第4問B

あるテーマについて3人が議論している会話（語数約300）を聞き、様々な見方や考え方の共通点や相違点を把握し、最終的な話し合いの主旨を判断できる力を試す。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

本試験を構成する四つの大問の出題意図及び解答結果は、次のとおりである。

#### (1) 第1問

この大問の出題意図は、比較的平易な英語を聞いて、内容を的確に理解できるか否かを見るものである。図表を用いた問1と問6は、視覚情報の助けがあったため、比較的容易に正解に至ったと思われる。問5は例年どおり聞き取った内容を基に計算することが求められる問題であるが、正答率が低かったものの、識別力の高い問題であった。問4は正答率及び識別力が低い問題であったが、対話内容の理解において鍵となる語彙知識・文法知識が複数含まれていたこともあり、選択肢の識別で苦勞した受験者が多かったようである。大問1は全体的に識別力のある良問であった。

## (2) 第2問

この大問の出題意図は、比較的平易な対話を聞いて、場面・目的・言語の機能などを理解し、適切に反応することができるか否かを見ることにある。話される英語そのものは比較的平易なものであるが、正答を導くためには、発話が行われている状況や2人の関係（友人、同僚、客と店員など）を類推し、文脈を把握する力が求められる。問9、問12及び問13は比較的正答率が低かったが、対話内容の理解に必要となる文脈の想起や応答（各選択肢）が担う言語の機能の理解に困難を伴ったため正解に至らなかった受験者が多かったと考えられる。

## (3) 第3問

## ① 第3問A

第3問Aの出題意図は、比較的平易な対話を聞いて、その場面や話者の意図を理解できるかどうかを問うものである。問14はスーパーの有料のレジ袋について、問15は週末に聞いた講義の内容について、問16はコンピューター実習室の場所について質問している。正答率を見ると、いずれも、標準的な難易度であり、かつ、識別力の高い問題であった。

第3問Bの出題意図は、視覚情報（アルバイト募集のチラシ）を見ながら比較的長い対話を聞き、その場面や話者の意図を理解する能力を問うものである。いずれも、聴取した情報と視覚情報を照合することが求められており、認知的負荷がかかる設問であった。標準的な難易度であった問17と問19に比べ、問18はやや正答率が低かったが、いずれも識別力の高い問題であった。

## (4) 第4問

## ① 第4問A

第4問Aの出題意図は、少し長いまとまりのある話を聞いて、要点や概要をつかむことができるか否かを見ることである。問22が比較的容易であったことに比して、問20と問21は正答率がやや低かったが、成績上位層を識別するという点においては良問であったと言える。

## ② 第4問B

昨年に引き続き、3人が議論する形式の問題を出題した。3人のうちの1人が通っているギター教室を続けるべきかやめるべきかについて話し合う設定であり、それぞれの発話者の意見を正確に理解することが要求された。問23～25のいずれの問題も正答率及び識別力の高い問題であった。

## 3 出題に対する反響・意見等についての見解

「英語（リスニング）」の試験に対して高等学校教科担当教員並びに教育研究団体から意見・評価を頂いた。いずれも好意的な受け止め方をさせていただいたことに感謝したい。以下では、高等学校教科担当教員から頂いた意見・評価の要点を挙げ、当部会の見解を述べておきたい。

## 高等学校教科担当教員の評価、意見・要望・提案等

## (1) 評価の総括

## ① スクリプト

例年同様、日常の様々な場面を想定した会話が盛り込まれており、「多様な場面における言語活動を経験」させることを促す指導要領の趣旨に沿ったものと言える。「昼食へ誘う」「本の感想を聞く」「テストの結果について話す」などの場面を扱った問題では、“Do you ~?”で始まる質問文に対し、Yes/Noで答えないなど、実際の会話を再現したauthenticな表現が見られ、より現実に即した会話の場面の中で文脈を理解する力、話者の意図を類推する力が試された。また、検定教科書ではあまり見かけない“kind of ~”の使われ方や“a bit more”、“be

hard on yourself”など日常会話ではよく使われる表現が多用されており、これらの表現を知識として知っているだけでなく、聞いたり話したりできる使用レベルにまで高めておくことが求められている。第3問Aのコンピューター室の場所を聞く問題では、聞いた内容を頭の中で絵として思い浮かべた上で思考することが求められ、第4問Bの3人の会話を聞いて答える問題は、理解を妨げたり受験者が混乱するような発言がなく、処理すべき情報量が適度であり、いずれも良問であった。一方で、聞き取った数値の情報を瞬時に取捨選択した上で計算する必要がある問題や、単語そのものは知っているも、コンテキストにふさわしい意味を音声情報のみで理解する力が必要とされる問題などは、受験者にとって難易度が高かったと思われる。

② 質問文と選択肢（図表中の表現を含む。）

例年同様、複数の情報を結び付けて判断し、処理する力を求められる問題が多かった。問題によっては、受験者が正答として予想するであろう表現が選択肢の中に含まれておらず、場面・文脈を的確に把握した上で話の流れを類推する力がなければ正答にたどり着けなかったり、正答が抽象度の高い表現に言い換えられていたため、限られた時間で意味を正確に把握できなかったと思われるものもあった。

③ 音声

数値等を含む会話では、実際のコミュニケーションの場面でも確認のために聞き返すことがあることを考えると、現行の2回再生は自然である。会話の場面に応じて声の調子を変えるなど、情報が伝わりやすい工夫がなされていて、受験者にとっては場面が想像しやすい音声となっていた。全体的な速度は昨年度に比べややゆっくりであったが、場面や会話の目的に照らし合わせるとおおむね適切であった。来年度から実施される大学入学共通テストでは、問題の中には1回再生になるものもあるが、今年度同様、受験者にとって過度な負担とならないよう配慮が求められる。

④ まとめ

文法・語彙・表現・発話速度などの観点から、受験者の日頃のコミュニケーション活動における学習成果を測るものとしておおむね適切であった。検定教科書に比べると場面設定が実際の会話に近く、日頃から使用場面を想定した言語活動をどれだけ行っているかが問われており、authenticで多様な表現に触れさせるとともに、四技能全てでそれらを使えるように指導していくことが求められている。また、実際のコミュニケーション同様、センター試験においても聞き取ったり読み取った情報を整理して正確に判断する力が求められており、教育現場においても引き続き実践的な思考力や情報処理能力を養うことが必要である。

(2) 意見・要望・提案等

① 今回の試験は、いずれの問題も適切な語数であったと考えられるが、来年度の大学入学共通テストでは、1回読みの問題が含まれるため、問題量の増加が予想される。試験時間を考慮した上で受験者にとって極端な負担増とならないように配慮していただきたい。

② 第1問では、受験者にはややなじみのない場面設定が見られた。時間の制約がある中で状況を判断し、解答を選ばなければならないので、受験者が直接経験することはなくても、書物や報道、他教科の学習の中で疑似的な体験をしており、状況を想像できる対話という点に配慮していただきたい。第2問については、やり取りの中での自然な応答を選ぶ能力が問われるので、作為的な選択肢が正答とならないように引き続き配慮をお願いしたい。また、authenticな会話を身に付ける必要性があるものの、未習の表現に対し、短時間で正確に推量し、解答を導くのは受験者にとってやや負担が大きいと思われる。推量することに加えて、複雑な情報処

理を必要とするような問題にならないよう配慮していただきたい。第3問、第4問については、聞き取った情報を基に状況をイメージしたり、言い換えを駆使して内容を再構築したりすることを求める設問が多く、単に英語を聞き取るだけでなく、聞き取った情報を内在化して理解する必要があるため、複雑な内容や過大な情報量とならないよう、文の構造・語彙・パラグラフ構成に配慮しつつ、設問が主要な内容に関するものであり、かつ前半・後半のどちらかに設問の答えが集中しないようにしていただきたい。

- ③ 今後とも、日常使われる自然な表現や、受験者が近い将来経験するであろうコミュニケーションの場面を取り入れていただきたい。なお、来年度から導入予定の1回聞きの問題については、実際の会話場面においても1回しか聞けないような情報について聞き取る力を測る問題を検討していただきたい。その場合においても、会話中の言い換え表現や視覚情報が理解の助けになるよう配慮していただきたい。
- ④ 今年度の発話速度や明瞭さは受験者にとって取り組みやすいものであったと思われるが、実際の英語の運用場面での発話速度は、トピックの内容や状況、相手との関係性、話者の個人的な特性など、様々な要素によって変化するものであるため、大学入試においてもそれぞれの状況にふさわしい速度であることも必要だと考える。一方で、入試という性質上、リスニングテストにおける適切な発話速度をどこに設定するかは非常に難しい問題である。来年度、1回再生の問題が含まれる中で、場面設定や処理すべき情報の量と種類、質問文と選択肢の難易度など、様々な要素を総合的に勘案して、受験者の聴解力と聞き取った情報の処理能力を適切に測れる出題となるよう配慮していただきたい。

当部会では、上記のセンター試験に関する御意見等は、本試験の性格とあるべき姿を踏まえた妥当かつ適切なものであると考えている。

#### 4 ま と め

問題作成に際しては、語彙や表現は教科書に基づいていることに留意しつつも、実社会で想定されるコミュニケーションを重視した設問を心掛けた。今年度は、昨年度に引き続き、6割程度の平均点を維持しつつ、識別力の高い問題を含んだバランスの取れた試験であったと考えている。